



篠田さま

八月二日

まだ三回目ですが、この往復書簡が楽しみで仕方ありません。二人でなにかを煮詰めていくというよりも、つねにどこかへと漂流していく感じ。前回の篠田さんの書簡の最後のくだりはまさに象徴的で、「そのような分厚い退屈で敷き詰められた中でこそ、引き揚げられたキンメダイやたつたひとつの怒声が、私たちに強く焼き付けられるのかもしれない」という一文に、強く感銘を受けました。

退屈さはおっしゃるとおり、なにかと比較してこそ、際立ち、記憶に強く残るものなのでしょうね。思い返してみれば、ぼくが好きな小説はたいてい最後のくだりが圧巻で、そのインパクトによって、これまで読み流してきたあらゆるディテールが息を吹き返し、活字の連なりでしかなかった紙の束が、大げさにいえば、まるで生きもののように感じられました。

我が家には大きな書棚があり、そこに数百冊の本が並んでいるのですが、そのなかに二冊だけ、ぼくの日記があります。それぞれ、長男と長女が〇歳のころの一年間を記したものです。本を読むのに疲れたとき、

ぼくはその日記を手にとり、過ぎ去ったむかしを懐かしみます。

本の仕様はハードカバーで布張り。一見すると、その二冊は、書棚に並ぶ新潮社や晶文社、岩波書店やみず書房の本と変わりなく見えます。本に強く愛着のあるひとであれば、目ざとくそれを発見するでしょうが、ふつうのひとつであれば、まずその存在に気づかないでしょう。

でも、その二冊の日記に愛着をもつぼくは、その二冊の本を特別に思うどころか、「書棚から浮いてるな」と思うわけです。あまりに大切に思うゆえに、その存在が<sup>い</sup>弥が上にも目に入り、ときどき書棚から抜き去ってしまいたくなるほどです。

これから書くことは、あくまで個人的な意見として聞き流してほしいのですが、読んでいない本が多ければ多いほど、本棚というのはきれいに整っていきます。特別な思い入れがないゆえに、本の内容、サイズ、色にに応じて、屈託なく本を並べることができ、その作業を終えたあとは、まるで新刊書店、あるいはオープン前の古書店の棚を眺めるように、自室の本棚を眺めることができます。

けれど、思い入れの強い本ばかりが並ぶと、本棚は写し鏡のようになるのであり、まるで生きもののように見えてきます。上述した日記は例外としても、若いころに強く影響を受けた本の背をみると、その内容を思い出すというよりも、当時の自分の心境や、そのころに暮らした部屋、付き合いのあった友人たちを思い出すのであり、ぼくはなんとなく、その本を手に取り避けてしまいます。けれども、それは特別な本です。生涯読み返すことはないとしても、ぼくはその本を手放すことはないでしょう。

最後のくだりが圧巻で、いつまでも忘れられない小説はいくつもあります。よく思い出すのは、イタロ・カルヴィーノの『まっぶたつの子爵』です。この小説は、大砲によってまっぶたつに分かれてしまった叔父を寓話的に描いた作品で、右半身と左半身に分かれた叔父は、それぞれ残酷な人間、善なる人間となつて町を混乱させます。残酷な人間が人々に災いをもたらすのは容易に想像がつくのですが、一〇〇%の善である人間もまた、同じように町の人々を苦しめるので